

「イルミネーション」海 法龍 (かい ほうりゅう)

私の住む街の目抜き通りは、12月に入ると街路樹にイルミネーションが輝きます。中旬ごろからは商店街もクリスマスの飾りつけやクリスマスソングが流れて、年末に向けて街は一層華やかになってゆきます。

師走の押し寄せた夕暮れに、いつも親しくしている植木屋さんのたけちゃんが年末の挨拶に来ました。私のお預かりしているお寺には猫の額ほどの庭があります。知人を介して低コストで作庭w0お願いしたのが、たけちゃんとのお付き合いの始まりでした。

私は住職のいなかった縁を頂き入寺しました。入寺した当時、境内には雑草が生い茂り雑然としていたので、もう少し綺麗にしたいと思っていました。参詣の皆さんが気持ちよくお参りのできるようにと、たけちゃん相談して、小ぶりながらそれなりの庭を造ってもらいました。

打ち合わせの時でした。自分なりの庭のイメージがあったので、樹木草花の本をみながら、この木をあそこに、この花をここに、いろいろと私の要望を好みのままに話していると、たけちゃんは苦虫を嘔み潰したような顔になっていきました。

そして私の顔を見て「ご住職、この木は西日に弱いんです。この花も同じです。綺麗だから植えると云っても、植物も生きていますから環境が大切なんです。日光に強いものもあれば弱いものもあるし、土が湿ってなければならぬものもあるし、日当たりが良すぎてもいけないものもあるんです」

私はただ哑然として聞いていました。少し恥ずかしくなっていました。自分の無知を指摘されたのです。

樹木草花もいのちであるということです。わかっているつもりだったのですが、まったくわかっていなかったのです。樹木草花もそれぞれの性質、つまり個性があって、それを知らず、自分の好みだけで考えていたのです。私はエゴイストそのものでした。樹木草花にもいのちがあると、人として真宗の僧侶として、何万回も聞き何万回も言ってきたはずでした。

私は年末の挨拶に来てくれた、たけちゃんにお願いして、彼の軽トラックに乗せてもらい、何かの用事を済ませるために、師走の夜の街を走ってもらいました。繁華街の目抜き通りに入ると、街路樹のイルミネーションの輝きが目に映りました。私は思わず「きれいだなあ！」と運転している彼に話しかけると、「ええ、でもねえ、ご住職、木にはあんまり良くないんです」と意外な返事が返ってきたのです。

それで私は「どうしてよくないの」と尋ねると「いやあ、木が眠れないのです」と。「えーっ、木も眠るの？」と聞くと「そうですよ、昼間は光合成しているから起きているんです。日が沈むと暗くなるから光合成しません。つまり活動を停止して眠っているんです。イルミネーションは、電飾であんあに明るくしているわけですから、木は眠れず、弱って寿命も短くなってしまふんです」

目から鱗うろことはこのことです。頭を何かで殴られたような気がしました。やっぱり、わかっているようでわかっていない、見えているようで見えていない私でした。それを無明むみょうと言います。

樹木草花だけでなく、人の存在に対しても、あらゆるいのちに対しても同じでしょう。いのちをいのちと感覚する世界を失って生きている私の姿がありました。年の瀬に、再びたけちゃんから大切なことを教えられました。

(同朋誌12月号から転載させていただきました)